

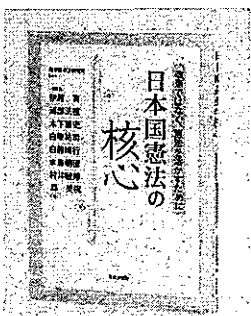
日本国憲法の核心

法学館憲法研究所 編

問題の「核心」をさらしつづ
目的を果たそうとするのは安
倍首相の常とう手段です。今
回の9条改憲提起でも『違憲
かもしれないけれど、何かあ
れば命を張ってくれ』という
のはあまりにも無責任」と、
自衛隊の「合憲化」にそのね
らいがあるかのように語って
いるのはその端的な例です。

これに対して本書は、憲法
と現実のずれはどこにあるの
か、それはなぜおこっている
かを、「憲法の『核心』問題を
選び出して論ずる」(森英樹)
ことを目的に構成されていま
す。浦部法穂・森英樹対談を
総論とし、国民主権、憲法9
条、沖縄と地方自治、表現の
自由、軍事裁判所、憲法改正
権、象徴天皇制がその「核心」
として選びだされています。

安倍首相が2020年とい
う期限を明示して9条改憲発



日本評論社・1700円

戦争する国づくり明かす各論点

著者は森英樹、浦部法穂
のほか伊藤真、木下智史、
白藤博行、水島朝穂など

言をする前に企画された書で
すが、もちろんその焦点は9
条にあります。しかしいった
ん9条改憲で突破口が開かれ
れば、それは「憲法の『核心』
問題」すべてに及びます。

本書が、その「核心」とし
て選びだした論点が適切なも
のであることは、戦争法施行
による南スーダン派兵・米艦
護衛に踏み出したものの憲法
の「制約」が立ちはだかつて
いることによって実証されて
います。例えば、現在は許さ
れていない軍事裁判所の設置
の問題がすでに論議されてい
ることをみても明らかです。

各論点を通じて、逆に「戦
争する国づくり」の全体像が
浮かびあってくることもな
っています。それは、結果的
に「現憲法のトータルな否定
であり旧体制への『回帰』」
(浦部法穂)にならざるをえ
ません。安倍9条改憲阻止の
重要性、緊急性を強く感じさ
せます。

評者 川村俊夫 憲法会議代表幹事